

# 看護師が 小児外来で使用する機器

－使い方と管理のポイント－

【特集にあたって】

## 医療機器を使いこなしチーム医療に役立てよう

腎不全で長らく透析生活を送っていた筆者の姉が、日本臓器移植ネットワークを通じて腎臓移植を受けた。新しい人生をいただいたといえる。透析技術も驚くに値するが、臓器移植のシステムのスムーズさにも驚かされた。医療技術が熱意に合致したとき、みごとな成果につながっていく。

医療技術の進歩により、新しい医療機器が次から次に開発され、われわれ医療者が行う医療行為は大きく様変わりしている。例えば、心拍モニターやパルスオキシメーターなどの普及がもたらした患者利益は計り知れない。患者にとって、より適切な医療が受けやすい環境となった。その反面、日々の看護業務も機器の進歩に合わせ変化を余儀なくされている。現代の看護師は、より看護の専門性を求められ、医療チームのなかで中心メンバーとなっている。看護婦が看護師という名称に変わり、その業務内容は「師」に表れているように、より深い専門知識が期待されている。

本特集では、「看護師が小児外来で使用する機器」というテーマを取り上げた。自ら使用する医療機器の正しい使い方をどれだけ理解しているかを省みることも有益であろう。使い方がわからずに、「機械音痴」と逃げてばかりはられない昨今である。

本特集では、そのような機器の取り扱いに苦手意識が多いであろう分野にスポットを当ててみた。

現代日本の医療には、個人の権利意識、患者意識の高まり、研修医制度の変化、大学病院を頂点としたヒエラルキーの崩壊などがみられる。輸出産業としてもクローズアップされるようになり、産業としての医療という視点が広がっている。これらの変化を受けて、医師を頂点とするピラミッド型医療からチーム型医療に変わってきている。

このような環境の変化のなかで、看護師の活躍できる機会は増えているが、それにともない責任も大きくなっている。病をもった人々により長い時間、寄り添うことができるように、医療機器に使われるのではなく、医療機器を使いこなす必要がある。大きく医療業界が変化するなかで、医師に限らずコメディカルスタッフに対する期待も今後ますます大きくなっていくであろう。

実践的な知識となるように、臨床現場の第一線で活躍されている諸先生方に原稿をお願いした。臨床での一助になれば幸いである。

医療法人社団まなと会はしもと小児科院長  
橋本政樹 Hashimoto Masaki